

た部分がこれからどうなっていくのか。人間が効率を求めて、AIというある意味では禁断の果実を食べました。これは、人間がAIを支配できるということが前提にあったわけです。将来、遠い将来かどうか分かりませんが「こんなはずじゃないよ」という時代にならないよう祈っています。そしてこのデジタル時代の幕開けは、そんな未来を予感するようなものを感じざるを得ない領域に一步大きく踏み出した、ということを感じます。

崔 そこだと思います。どのような共存のしかたがあるのかは、まだまだ言ってみれば実験的な部分も多く残っています。実験的な部分というのは要するに矛盾です。例えば、映画をアナログ時代のフィルムで撮っている頃の、ある種の作り手の良さ。一方、今は腕がなくても発想だけでなんと

かできてしまうみたいなこともある。そこでは、新たな才能を発見するんですが、同時に職人的な腕を必要としないという世界観も生まれてきます。これ、矛盾ですよ。例えば、日本には時代劇という特異な文化を持つ映画やテレビドラマがあります。それが、そうこうしているうちに全部、より現実感のあるCGで人間を使わずに撮影してしまえ、みたいなことです。さらに、演出も創作も仕上げも全部リモートといったことになつてしまうと、これは全然血の通っていないものになつてしまうわけです。

映画映像というのは100年以上にわたる科学の進歩と密接な関わりを持っています。映画技術と映画の機材、テレビもそうですが、何によって発展してきたかという、残念ながらすべて戦争です。戦争を記録するために、軽くて頑丈で寒

メラが必要とされました。我々が今使っている機材は、そうやって進化してきました。イギリスの産業革命で世界がひっくり返ったように、さまざまな技術が戦争によって一歩も二歩も前に出たという現実があることも忘れられません。だから、その兼ね合いだろうと思います。

新春に向かないちょっとネガティブな話になってしまいましたので、ここではらを一つ。絶対、新作を撮りたいですね。これは映画監督に多分許されるであろう詐術詐欺の類いですが、ぜひ新作を撮りたいと思います。亡くなられた私の大先輩で尊敬している大林宣彦監督も自分で言っていました。「死ぬ死ぬ詐欺で、崔、遺作は3本撮れるぞ」と。こういうバイタリティを僕は学びたいと思います。つまり我々の体と頭というのは元気なのが一番です。ですから元気になるためにはそ

れなりにきちんとした生活を送らなければいけないのはよく分かっているのですが、それができていない崔洋一でございました。

大木 ぜひ崔監督の新作を映画館で見たいですね。

崔 いや、シリウスで特別上映でしょう。

新年の抱負



崔 新年の抱負はというと、やはり、新作を世の中に聞きたい。皆様と喜びを共有したい、喜んでいただきたいというのが第一の願いです。市長もお忙しいのでぜひシリウスで特別上映をして、市民の皆様とともに市長にも私の映画を鑑賞していただけるような時間ができたら、私もうれいします。どうぞ本年もよろしくお願いします。

大木 やはり私は、今年の抱負も健康ですね。市民の皆様も、健康に十分注意していただいで、楽しい一年を過ごしていただきたいと思います。



この対談の様子は、FMやまと(7・7)で、1月1日(祝)午前10時から放送します(2日(日)・3日(月)も同時刻に再放送)。